自 然 言 語 処 理　134－18
（1999．11．26）

連想検査法を用いた格助詞「に」の意味構造分析

茂木亮輔
東北大学大学院 国際文化研究科
hama@insc.tohoku.ac.jp

日本語の助詞において、「に」は多様な役割を持ち、「が」や「を」のように文法的な役割の強い助詞と、「へ」や「から」のような文法的役割が薄く意味的役割の強い助詞の両方を併せ持つ。連想は、心内辞書における単語間ネットワークの活性伝播による言語使用時の瞬間的な記憶利用であると考えられ、本研究では、連想検査法を用いて、助詞「に」からの単語の活性化と、それと名詞・動詞との共起で示される意味の傾向を明らかにした。また、先行研究における作文や書物からのデータを用いた頻度調査との意味分類の比較も行った。

An analysis of the semantic structure of the Japanese particle *ni*, based on association

Ryousuke Mogi
Tohoku University, Sendai, 980-8576, Japan.

Of the Japanese particles, *ni* plays a wide range of case roles including syntactically important ones such as those played by *ga* and *o* , as well as those which are of less syntactic, but more semantic importance, like those played by *e* and *kara*. Assuming association to be the instantaneous use of memory at the time of language use, this research uses an association method test and finds a tendency for meaning to be shown in the collocation of the activation of a word through the particle *ni*, and the noun or verb. In addition, it compares the semantic categorization of frequency surveys of data taken from compositions and other written works in other research.

1. はじめに

言語を自由に使えるようになるためには、単語の学習が必要不可欠である。言語使用時、単語は、どのように記憶され、そして、どのような形で利用されているのだろうか。名詞や動詞のような単語認知に対しては、心内辞書と呼ばれる研究が進められ、意味情報や概念関係だけでなく、形態や発音の類似性、反意語・熟語関係も書き込まれているとされる[1]。このネットワークを通じて、ある単語が刺激されれば、その刺激が他の単語にも伝わっていく。文中の単語を理解する際は、その単語から様々な語が刺激され、共起する単語との干渉により、意味が限定されていく。この処理は、効率的に行なうため、使用頻度の高い意味がより刺激の伝播を受けやすくなっていると考えられる。

本稿では、多様な意味役割を持つ助詞「に」からの連想検査により、心内辞書における単語間の

ネットワークを浮かび上がらせ、共起及び意味の資料から、格が持つ意味役割を認知する過程の解明につなげたいと考える。

2. 先行研究

助詞「に」の意味・用法の関連を示す先行研究は、基本的意味を設定する場合と、何かある基準を設定する場合との２つに大別できる。基本的意味としては、「密着の対象を示す」、「くっつくところ」などがある[2][3]。規準としては、「共存」・「語順」・「助詞交替」などがある[4]。しかし、語順調査を除き、計量的調査に基づくものは少ない。

頻度調査も、計量的調査の１つとして挙げられるが、一般に、出現頻度（使用頻度）の高い単語ほど認知されやすいことから、文内の助詞の意味役割を認知する過程の解明にも大いに関連する。助詞「に」の頻度を調査した先行研究には、作文による使用頻度調査と、書物による頻度調査の２種がある。

前者の書物における助詞「に」の頻度調査は、資料『国定読本用語総覧』巻６・７の用例（4156例）に対して、述語に対する助詞の意味役割である、深層格 28 種の頻度調査を行ったものである[5]。上位５種を表１に示す。

表１：「に」の深層格頻度（上位５種）

	場所	場所-終点	時	終状態	受け手
例数	1322	523	329	299	297
(割合)	(32%)	(13%)	(8%)	(7%)	(7%)

注：深層格 28 種は、動作主、経験者、無意志主体、対象、受け手、与え手、相手１（共同行為者）、時、時-終点、時間、場所、場所-終点、場所-経過、終状態、属性、原因・理由、手段・道具、方式、条件、目的、役割、内容規定、観点、比較の基準、度合、陳述、保留。

後者の小学２～６年生における作文による助詞「に」の使用頻度調査では、２年生及び５年生で最も頻度が高かった用法は「存在の場所」であり、３・４年生では「動作・作用の時」であった[6]。また、最終学年の６年生では、「存在の場所」「動作・作用の時」「相手」がほぼ同程度の割合で高頻度を示した。意味分類は、田中[7]に変更を加えた 10 種を用いている；６年生での高頻度順に、a. 存在の場所、b. 動作・作用の時、c. 相手、d. 変化の結果、e. 到達点・到着点、f. 動作の目的、g. 動作の対象、h. 動作の原因・理由、i. 状態の対象、x. その他。

これら客観的頻度に対して、連想検査から得られる頻度は“主観的”な頻度と言えるが、連想は、通常の瞬間的な記憶利用に、より近い状態と考えることができる。本研究では、この連想により、言語使用時の意味探知過程の解明に役立てたい。

3. 調査方法

梅本[8]では、日本語の刺激語 210 語に対して、１語当たり最大４語の反応語を求めており、鋤柄他[9]では、日本語の刺激語 30 語に対して、最大 10 語の反応を求めている。しかし、これらの刺激語は、名詞・動詞・形容詞にとどまるため、格助詞の役割を知ることは難しい。

本調査では、刺激語を助詞「に」とし、その反応として、単語ではなく文の提示を最大４つ求めた。なお、反応語の提示を求める文には、助詞「に」が表れないようにした。回答者は、言語や文学を専門に学んでない日本人 57 名である。

4. 調査結果

刺激語「に」に対する反応文は、最初に連想した文（以降、文１と略す。文２～４も同様）が、57 例、文２が 46 例、文３が 36 例、文４が 15 例、合計 154 例である。１人当たりの産出文は、平均 2.7 文である。なお、助詞「に」ではなく、「に」を含む副詞が連想されている文は除外し、次に連想した文を繰り上げた。

4．1．先行詞の共起

一文中に、助詞「に」が複数表れた反応文があったため、先行詞の合計は155例である（全先行詞については本論文末の付録参照のこと）。「に」に先行する品詞の分類を表2に示す。但し、分類は、文全体の意味からではなく、単語自体の意味に基づいた。

表2：先行詞の分類別頻度

	文1	文2	文3	文4	合計
A名詞					
a-1 人・動物	30	18	14	2	64(41%)
a-2 空間	18	11	5	5	39(25%)
a-3 物	3	2	3	4	12(8%)
a-4 事柄	1	4	2	1	8(5%)
a-5 身体部位	1	3	3	1	8(5%)
a-6 時間	1	1	4	1	7(5%)
a-7 その他	1	4	3	1	9(6%)
B動詞					
b-1 目的	2	3	2	1	8(5%)
合計	57 (37%)	46 (30%)	37 (23%)	15 (10%)	155 (100%)

表2より、品詞は名詞が95%を占め、動詞の連用形は5%にとどまった。したがって、助詞「に」から文を連想する場合、ほとんどの人が名詞を連想することになる。その名詞の中でも、最も多く連想されるのが、「a-1 人・動物」であり、全体の4割を占める。次いで、「a-2 空間」が多く連想され、全体の23%を占める。

続いて、先行品詞の上位5種を表3にまとめる。

表3：先行詞（上位5種）

	文1	文2	文3	文4	合計
a-1 人・動物					
①私・僕	10	2	3	1	16(10%)
②あなた・あんた・君	8	3	1		12(8%)
④犬・猫・蚊・鳥	2	3	3	1	9(6%)
③身体部位(頭etc.)	1	5	2	0	8(5%)
a-2 空間					
①学校・会社	5	1	1	1	8(5%)
合計	26 (17%)	14 (9%)	10 (6%)	3 (2%)	53 (34%)

注）表内の百分率は全名詞数155例を母数とする。

表3より、上位5種は、「a-1 人・動物」と、「a-2 空間」の2つに分けることができる。この上位5種で、全名詞数の約1/3を占め、このうち、「a-1 人・動物」に属する①～④で、全体の約1/4を占める。一人称代名詞の「①私・僕」が最も多く、全体の10%、次いで、二人称代名詞「②あなた・あんた・君」が全体の8%である。文1に限定すれば、①及び②の2種を合わせると、57例中18例で32%を占め、およそ3人に1人は、助詞「に」に対して、一人称代名詞・二人称代名詞を連想したことになる。一方、「a-2 空間」で最も多かった用例は、「①学校・会社」だが、全体の5%と少数にとどまった。

4．2．述語の共起

助詞「に」と共起した述語は全て動詞であった。分類を表4にまとめる（全述語については付録参照のこと）。但し、分類は、文全体の意味からではなく、単語自体の意味に基づいた。

表4：「に」と共起する述語の分類

	文1	文2	文3	文4	合計
A人の移動	21	16	7	9	53(34%)
B物の移動（人・動物へ）	22	9	5	0	36(23%)
C言語伝達	3	2	4	1	10(6%)
Dつく etc.	2	3	2	0	8(5%)
Eなる	0	1	5	0	6(4%)
F物の移動（物へ）	0	2	1	1	4(3%)
Xその他.	8	13	12	5	38(25%)
合計	57 (36%)	46 (30%)	36 (23%)	15 (10%)	155 (108%)

表4より、最も頻度が高い述語は「A人の移動」を表す動詞群（行く／帰る／来る／入る／出るetc.）で、全体の34%を占める。次いで、「B（人・動物への）物の移動」を表す動詞群（授受動詞／送る／渡すetc.）で、全体の23%を占める。この上位2種で、全体の57%を占めることになり、

「に」からの連想において、半数以上は、人や物の移動に関する述語を思い浮かべることになる。先行研究で基本的意味として設定される「D つく etc.」を表す動詞群（当たる／加える etc.）は、8 例で、全体の 3 %にとどまった。

更に述語を細かく見た場合の上位 5 種を、表 5 にまとめる。

表 5 ：高頻度述語（上位 5 種）

	文 1	文 2	文 3	文 4	合計
A 人の移動					
①行く	16	7	5	5	33(21%)
②帰る	3	2	0	1	6(4%)
B 物の移動					
①あげる・やる	11	4	1	0	16(10%)
b-2 くれる	8	2	0	0	10(6%)
C なる	0	1	5	0	6 (4%)
合計	38 (25%)	16 (10%)	11 (7%)	6 (4%)	71 (46%)

注）表内の百分率は全述語数 154 例を母数とする。

表 5 より、「①行く」の共起が最も多く、全体の 22%を占める。次いで多いのは、授受動詞の中でも、「①あげる・やる」が多く、全体の 10%、「②くれる」が 6 %であった（但し、「②くれる」10 例のうち、9 例は「ください」の形で表れた）。

4．3．意味による頻度差

4.1.節及び 4.2.節では、先行詞や述語に対して単語そのものの意味に着目した分析を行なった。本節では、文の意味を考慮した分析を行なう。意味分類については、先行研究との近似的な比較ができるよう、田中[6]に変更を加えたものを用いた。なお、＜人・動物＞を先行詞とする「g.動作の対象」の「に」は、「c.相手」とした。表 6 より、最も頻度が高い意味は、「c. 相手」で全体の 4 割を占める。次いで、「e. 到達点・到着点」が 22%、「場所」が 12%となり、この上位 3 種類で全体の 75%を占めている。

表 6 ：意味分類による頻度差

	文 1	文 2	文 3	文 4	合計
c. 相手	30	18	13	2	63(41%)
e. 到達点・到着点	18	7	4	5	34(22%)
a. 場所	1	9	4	4	18(12%)
f. 動作の目的	2	4	5	1	12(8%)
g. 動作の対象	3	5	2	1	11(7%)
b. 動作・作用の時	1	1	4	1	7(5%)
x. その他	1	1	3	1	6(4%)
d. 変化の結果	0	1	2	0	3(2%)
h. 動作の原因・理由	1	0	0	0	1(1%)
i. 状態の対象	0	0	0	0	0(0%)
計	57	46	37	15	155 (100%)

5. 考察

2 節で述べた、頻度調査[7]の頻度を、4. 3. 節で用いた意味分類に対応させると、表 7 のようになる。但し、深層格分類による対応であるため、数値は概算的なものである。表 7 より、書物の用例でも、連想検査の結果同様、「a. 場所」「e. 到達点・到着点」「c. 相手」の 3 種が高頻度となり、全体の 57%を占める概算となる。これら 3 種の意味に続いては、「b. 動作・作用の時」が 11%の頻度である。

表 7 ：意味分類対応による、書物での頻度

意味分類	国立国語研究所報告 113 の深層格	合計
a. 場所	場所、場所-経過	1325(32%)
x. その他	無意志主体、属性、手段・道具、方式、条件、役割、内容規定、範囲規定、観点、度合い、陳述、保留	629(15%)
e. 到達点・到着点	場所-終点	523(13%)
c. 相手	動作主、経験者、対象、受け手、与え手、相手 1（共同行為者）	494(12%)
b. 動作・作用の時	時、時-終点、時間	400(11%)
d. 変化の結果	終状態	299(7%)
h. 動作の原因・理由	原因・理由	161(4%)
f. 動作の目的	目的	159(4%)
g. 動作の対象	対象（人・動物は除く）	117(3%)
i. 状態の対象	比較の規準	49(1%)
計		4156 (100%)

また、2 節で述べたように、6 年生の作文によ

る調査の頻度では、6年生の作文では、「a. 場所」「c. 相手」と同程度に「b. 時」の頻度が高く、その後、「d. 変化の結果」、「e. 到達点・到着点」の順であることから、表6と比較すると、順序は違うものの、「x. その他」を除く、上位5種の意味は同じである。

これらの結果から、連想、書物、作文を通して、「a. 場所」「c. 相手」が高頻度となる。連想及び書物では「e. 到達点・到着点」も高頻度であるが、作文では、比較的頻度が低く、また、書物及び作文では、「b. 時」の頻度も高いが、連想では頻度が低い。

最高頻度のみを比較すると、書物や作文という客観的頻度では、「a. 場所」であるのに対し、主観的頻度では、「c. 相手」となる。連想での先行詞では、1人称代名詞「私（僕）」が最も多く、次いで2人称代名詞「あなた（君）」が多いことから、助詞「に」連想する場合には、身近な経験と結び付けていることが伺える。客観的頻度で多かった「時」の先行詞が、連想ではあまり表れないことから、言語使用者が時間軸に身を置くことはあまり意識されていない可能性も伺える。

述語の共起についても、頻度の高いのは、「人の移動」や「（人・動物への）物の移動」であることから、連想と「人の身近な経験」との結びつきの強さが伺える。

6. おわりに

先行研究で行なわれなかった、助詞を刺激語とする連想検査により、客観的頻度と主観的頻度の差異として、言語利用者自身の関わりを浮かび上がらせた。

課題点として、まず、検査対象者の人数を増やすことによる、検査精度の向上が挙げられる。更に、スムーズな連想による産出文と、時間を取り、考えこんだ結果の産出文の違いを考慮するため、反応時間の測定も必要と考えられる。

今後は、他の助詞についても調査し、心内辞書から意味を取り出す過程、及び、その過程での格情報の役割を明らかにしたい。

参考文献

[1] 阿部純一, 桃内佳雄, 金子康朗, 李光五：人間の言語情報処理 言語理解の認知科学, サイエンス社, pp. 22-98, 1994.

[2] 国広哲弥:ELEC 言語叢書 構造的意味論, 三省堂, pp。25, 1967.

[3] 鈴木重幸：日本語文法・形態論, むぎ書房, pp. 212, 1972.

[4] 金子弘：格助詞「に」の用法分類, 文芸研究 123, 日本文芸研究会, pp. 61-71, 1986.

[5] 伊藤美千子, 佐藤滋：格助詞「に、で」の習得における意味役割の発達的分化, 言語処理学会第2回年次大会予稿論文集, 言語処理学会, pp429-432, 1996.

[6] 田中稔子：田中稔子の日本語の文法-教師の疑問に答えます-, 近代文藝社, pp. 28, 1990.

[7] 国立国語研究所報告 113：日本語における表層格と深層格の対応関係, 三省堂, 1997.

[8] 梅本堯夫：連想規準表/大学生 1000 人の自由連想による, 東京大学出版会, 1969.

[9] 鋤柄増根, 中川敦子, 榎戸芙佐子, 平口真理：連続連想検査法－連想規準表と実施・採点－, ケント社, 1989.

付録

A 全先行詞の分類

	文1	文2	文3	文4	計	
一人称代名詞（私、僕）	10	2	3	1	16	A a-1
弟	3				3	A a-1
大人			1		1	A a-1
彼、彼女、妻		3	2		5	A a-2
子供	1				1	A a-1
自分			1		1	A a-1
職業名称（医者、先生、SE）	1	1	1		3	A a-1
人名（はっしー、広末、さわこちゃん、藤田、まりこちゃん）	2	2	1		5	A a-1
誰それ、人	2	2	1		5	A a-1
動物etc.（犬、蚊、鳥、猫）	2	3	3	1	9	A a-1
二人称代名詞（あなた、あんた、君）	8	3	1		12	A a-1
友人、友達	1	2			3	A a-1
家（～邸、寮）	3			2	5	A a-2
田舎	1				1	A a-2
海	1				1	A a-2
駅		1			1	A a-2
会社、学校	5	1	1	1	8	A a-2
グラウンド				1	1	A a-2
公園	1				1	A a-2
ここ、こっち		1	1		2	A a-2
実家		1			1	A a-2
食堂		1			1	A a-2
スーパー			1		1	A a-2
空、天		2	1		3	A a-2
地名（高知、北海道、タイ）	2			1	3	A a-2
（机の）上	1	1			2	A a-2
どこ		1			1	A a-2
どこか、どこそこ	3				3	A a-2
図書館	1				1	A a-2
庭			1		1	A a-2
待ち合わせ場所		1			1	A a-2
道		1			1	A a-2
椅子				2	2	A a-3
木				1	1	A a-3
車		1			1	A a-3
携帯電話	1				1	A a-3
これ				1	1	A a-3
自転車	1				1	A a-3
ジュース			1		1	A a-3
パソコン			1		1	A a-3
話			1		1	A a-3
物	1				1	A a-3
リンゴ		1			1	A a-3
雨		1			1	A a-4
授業		1			1	A a-4
衝動買い			1		1	A a-4
ため		1			1	A a-4
バイト			1		1	A a-4
パチンコ			1		1	A a-4
物思い	1				1	A a-4
旅行		1			1	A a-4
身体部位（頭、心、手、腹、鼻、目）	1	3	3	1	8	A a-5
明日			1		1	A a-6
給料日			1		1	A a-6
時間（5時、3時）	1	1			2	A a-6
夏			1		1	A a-6
のち			1		1	A a-6
夜中				1	1	A a-6
言葉		1			1	A a-7
団体名称（巨人、サークル、中日）	1	2			3	A a-7
時				1	1	A a-7
窓			1		1	A a-7
夢			1		1	A a-7
1つ		1			1	A a-7
1人			1		1	A a-7
会い			1		1	B b-1
遊び	2	2			4	B b-1
飲み			1		1	B b-1
走り		1			1	B b-1
見				1	1	B b-1
計	57	46	37	15	155	
	37%	30%	24%	10%	100%	
A 名詞	55	43	35	14	147	95%
B 動詞（連勝形）	2	3	2	1	8	5%
計	57	46	37	15	155	100%
a-1 人・動物	30	18	14	2	64	41%
a-2 空間	18	11	5	5	39	25%
a-3 物	3	2	3	4	12	8%
a-4 事柄	1	4	3	0	8	5%
a-5 身体部位	1	3	3	1	8	5%
a-6 時	1	1	4	1	7	5%
a-7 その他（団体名称、数etc.）	1	4	3	1	9	6%
b-1 目的	2	3	2	1	8	5%
計	57	46	37	15	155	100%

B 全述語の分類

	文1	文2	文3	文4	計	
会う	1	2		1	4	A
行く	16	7	5	5	33	A
帰る	3	2		1	6	A
来る		1	1		2	A
着く				1	1	A
出かける		1			1	A
出る		1		1	2	A
入団する	1				1	A
入る		1			1	A
向かう		1	1		2	A
あげる、やる	11	4	1		16	B
送る		1	1		2	B
贈る、プレゼントする		2	1		3	B
おごる			1		1	B
い）	8	2			10	B
取る	1				1	B
もらう	1				1	B
渡す	1		1		2	B
言う			1	1	2	C
聞く			1		1	C
質問する、きく	1		1		2	C
伝える		1			1	C
電話する	1				1	C
話し掛ける	1		1		2	C
話す		1			1	C
なる		1	5		6	D
当たる	1				1	E
加える		1			1	E
刺さる		1			1	E
参加する		1			1	E
付く			2		2	E
ぶつかる	1				1	E
抱きつく	1				1	E
入れる		1	1		2	F
置く		1			1	F
流される				1	1	F
ある		1			1	X
いる			1	1	2	X
浮かぶ		3		1	4	X
映る			1		1	X
教える	1				1	X
掛かる		1			1	X
書く		1		1	2	X
食う		1			1	X
知る			1		1	X
過ごす			1		1	X
する	2		2		4	X
座る、座す				2	2	X
頼む	2	1			3	X
点灯する		1			1	X
似合う			1		1	X
乗る	1	1			2	X
働く		1			1	X
走る			1		1	X
判明する			1		1	X
就る	1				1	X
ふられる		1			1	X
迷う		1			1	X
まかせる			2		2	X
見る			1		1	X
持つ	1				1	X
計	57	46	36	16	155	
A人の移動	21	16	7	9	53	34%
B人への物の移動	22	9	5	0	36	23%
C言語伝達	3	2	4	1	10	6%
Dなる（変化）	0	1	5	0	6	4%
Eつくetc.	2	3	2	0	8	5%
F物への物の移動	0	2	1	1	4	3%
Xその他	8	13	12	5	38	25%
計	56	46	36	16	155	100%
	36%	30%	23%	10%	100%	

C 反応文一覧

	文1		文2		文3		文4		計
1	けいたい電話に電話した	g	犬にえさをやる	c	スーパーにいった	e	犬に会いたい	c	
2	学校に行きます。	e	あなたにプレゼントします	c	庭ににわとりがいます	a	さくらの木に虫がいま	a	
3	猫にエサをあげる	c							
4	弟にプレゼントをあげた	c	友達に手紙を書いた	c					
5	私に、何か下さい。	c							
6	人に物を渡す。	c	実家に帰る	e	ジュースに氷を入れる	e	イスに座す	a	
7	先生に質問する	c	雨に加えて風もひどい	g					
8	北海道に行く	e	人のために働く	f					
9	高知に行く	e	車に乗る	a	自分に似合う	c			
10	図書館に行く	e	目に浮かぶ	a	後に判明する	b			
11	学校に行く	e							
12	手に職を持つ	x	手に入る	x					
13	あなたにあげる	c							
14	遊びに行く	f	サークルに参加する	g	バイトに行く	f			
15	友達の家に行く	e	走りに行く	f					
16	ものにあたる	g	人にたのむ	c	鼻につく	x			
17	公園に行く	e	5時に行く	b	彼にわたす	c			
18	君にあげる	c	駅に向かう	e	運を天に任せる	g	夜中に帰る	b	
19	どこかに行きたい。	e	藤田に会った	c					
20	人に物をもらう	c	待ち合わせ場所に行く	e	夏になる	b			
21	学校に行く	e	後で私に電話を下さい	c	大人になりたい	c			
22	私にお金を下さい	c							
23	いなかに帰る	e							
24	あなたにプレゼントをあげる	c	犬にえさをあげる	c	夢に見る	a	タイに行きたい	e	
25	私に物をください	c							
26	私に道を教えてください	c							
27	私は家に帰ります	e	あなたにプレゼントを贈りま	c					
28	僕に話しかけてください	c	りんごにしゅりけんがささっ	a	窓に幽霊がうつっている	a	これに書いてください	g	
29	私に電話を下さい	c							
30	3時にお茶をしましょう	b							
31	どこかに行く	e	頭に案が浮かぶ	a	私にまかせてください	c			
32	学校に行く	e	遊びに出かける	f	話に聞く	x	見に行く	f	
33	私にそれを下さい	c	空ににじがかかる	a	犬にえさをあげる	c			
34	あなたにあげる	c	学校に行く	e	猫に話しかける	c			
35	私は、弟におかしをあげた	c	私は旅行に行った	e					
36	私に夢を下さい	c	食堂に来いよ	e	こっちにおいで	e			
37	頭にボールがぶつかる	g	彼女にふられる	c	私は医者になりたい	c			
38	遊びに行く	f	彼に話す	c	私に聞いてください	c	グラウンドに出て下さい	e	
39	私に下さい	c	彼は私に本をくれた	c	学校に行く	e	母は私に言いました	c	
40	僕はあなたに恋をした	c	言葉にできなくても伝えたい	g	僕にできることを知りたい	c	時に流される前に	x	
41	ハッシーに出席を頼んだ	c	さわこちゃんにアイスをあげ	c	まりこちゃんにおごってもらった	c	花山邸に行った	e	
42	猫にエサをあげる	c	授業に出る	g	彼にプレゼントする	c			
43	私は弟に本をあげた	c							
44	家に帰る	e	一つになる	d	会いに行く	f			
45	広末に抱きつく	c	むかつくSEにケリを入れる	c					
46	あなたにあげる	c	ここにある	a	人に言う	c			
47	子供にめがねを取られた	c	妻にプリンを買って帰った	c	腹に肉がついて取れない	a	会社に行きたくない	e	
48	高橋が巨人に入団する	e	中日にマジックが点灯する	g	おいらは給料日に飲みに行く	b·f			
49	あなたに、あげる	c	君に、あげる	c	パチンコに行く	f			
50	自転車に乗る	a	晴海のところで道に迷った	a	確かテレビで歩けるという情報を目にしたと思ったん	x	やっとのことで浩心寮に着いた	e	
51	あなたに頼む	c	机の上に置く	a	明日になる	b			
52	海に行く	e	蝦(=蚊?)に食われる	c	一人にさせて	d			
53	どこそこ（場所）に行った	e	だれそれ（人）に会った	c					
54	私に、下さい	c	どこに、行く？	e	鳥に、なる	d	心に浮かぶ	a	
55	学校に行く	e	空に浮かぶ雲	a	パソコンに向かう	g	椅子に座る	a	
56	今日、友人に会いました	c	友達に手紙を送ります	c	あんたに一手紙を一送ったんだと	c			
57	物思いに耽る	h	遊びに行く	f	衝動買いに走る	f			

a. 場所	1	9	4	4	18		
b. 動作・作用の時	1	1	4	1	7		
c. 相手（授受・伝達含む）	30	18	13	2	63		
d. 変化の結果	0	1	2	0	3		
e. 到達点・到着点	18	7	4	5	34		
f. 動作の目的	2	4	5	1	12		
g. 動作の対象（人・動物除く	3	5	2	1	11		
h. 動作の原因・理由	1	0	0	0	1		
i. 状態の対象	0	0	0	0	0		
x. その他	1	1	3	1	6		
計	57	46	37	15	155		
c. 相手（授受・伝達含む）	30	18	13	2	63	41%	
e. 到達点・到着点	18	7	4	5	34	22%	
a. 場所	1	9	4	4	18	12%	
f. 動作の目的	2	4	5	1	12	8%	
g. 動作の対象（人・動物除く	3	5	2	1	11	7%	
b. 動作・作用の時	1	1	4	1	7	5%	
x. その他	1	1	3	1	6	4%	
d. 変化の結果	0	1	2	0	3	2%	
h. 動作の原因・理由	1	0	0	0	1	1%	
i. 状態の対象	0	0	0	0	0	0%	
計	57	46	37	15	155	###	